

論 説

医療と芸術のコラボレーション

画家 Chie



1. 芸術と医療

芸術は感性。医療は科学技術。対極にあるものと思われがちです。しかし、対極的に考えられがちな双方の特性を生かした、医療と絵画ならではのコラボレーションがあるのではないだろうかと思います。こう考えて、4年ほど前から取り組み始めました。まだまだ小さな波紋ですが、少しずつ輪が広がっていると実感しています。

2. きっかけ

人はこころの生き物です。私の身近な人が乳がんになりました。全摘が必要と診断され、苦しんでいました。悩んだ末、手術。再発もなく医療としては大成功。しかし精神的にはゆがんでしまい、その後、気持ちのダメージによる落ち込みの日々を送っていました。そのときに、人はこころの生き物だから、命あっても心がなくなったら生きていないに等しいと思いました。そして、画家として自分が何かできないかを考えました。この方は私の絵のファンでしたから、少しでも力になればと思い、私の絵をプレゼントすることにしました。すると「絵を見ていると生きる力がわいてきた」「胸の傷なんてどうってことないと思えるようになった」といってくれ、明るさを取り戻してくれたのです。

画家としての活動を始めて11年になります。これまでの多くの個展に来場して下さった方々の、不思議だけれど画家冥利につきる反応を数多く見てきました。全盲の方が誘導なしで

すべての作品の中央にたち「すごくなつかしく温かさを感じます。気持ちよくてここから動けない」といってひとつひとつを鑑賞してくれたこと。涙を流し、「背中に背負ってたものを降ろせた」「お母さんのおなかの中にいるようで安らぐ」「絵から温かい光が出ているようで気持ちが楽になった」といってくださった方々。

これらの経験から、絵画は、芸術・美術作品として鑑賞したり飾ったりするだけではなく、人のこころを癒やし、人々の心を楽にする「道具」として使えるのではないかと考えるようになったのです。

実際に私自身、体が弱く、入院経験もあります。ベッドで寝ていると天井を見る時間が多いのですが、病院の天井はなぜか虫が這ったように見える穴のあいたボードのものが多く、気がめいるものでした。お金をかけなくても、せめて一工夫あれば患者の気持ちもやわらぐのでは…と思っていました。

このような体験から、医療の場で、私の絵が何かお役に立てるのではないかと考えるようになったのです。現在、一般的にいわれるアートセラピー（絵画療法）とは、「描いた絵を通して心を探る」あるいは「絵を描くことで心をひらく」というものだと思います。いずれも自らの[作業]を必要とするものです。しかし、私が取り組みたいのは、作業を要するアートセラピーではなく、たとえ寝たきりの方でも体感できる「絵をながめるアートセラピー」です。絵画には、医療のように、病の原因そのものを取り去る力

はないけれども、絵をながめることにより、精神・ところに働いて、痛みを和らげたり心を楽にしたりすることができるのではないかと思います。

3. 科学的な検証の必要性

私自身は、絵画の持つ不思議な力を信じています。しかし、医療のような高度な科学的分野でお仕事をされている方々には受け入れられにくいのではないかと思います。もちろん、何人かの医師の方々が私の思いを理解してくださり、ある精神科医の先生は、抑うつ度や α 波の測定などにより絵の効果を評価してくださいました。

しかし、科学は「効果の客観的な検証（統計的な有意差など）」「再現性」が重要で、単に感覚的・定性的に効果があるというのでは医療の場で本格的には使ってもらえない、という指摘をいただきました。そこで実際の医療の場で科学的な検証が必要だと思っていたところ、福岡の岡部病院が協力してくださることになりました。その後もいくつかの病院と協働をさせていただいていますが、代表的なものを紹介させていただきます。

4. 病院とのコラボレーション

(1) 福岡・岡部病院

ここでは、「ChieArtセラピー展」と称して、6カ月以上にわたり玄関ホールから待合室、診察室、治療室にいたるまでの院内の各所に24点の原画を展示しました。また、人工透析の際の精神的な落ち着き度や穿刺痛の緩和効果などを定量的に測定してくださいました。その結果、7割の方に穿刺痛の緩和効果が認められることがわかるなど、有意差は得られないものの心のケアに効果があることが定量的に把握されました。またこの取り組みは福岡市立美術館において「ChieArt展～ホスピタル・アート～」として

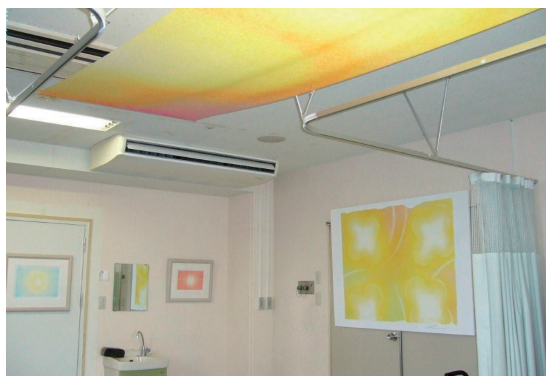
紹介されました。



岡部病院

(2) 群馬・堀江病院

ここでは、医療者側に大きな負担がなく、なおかつ患者側のニーズを満たすホスピタルアートの一つの試みとして、絵画の効果が恒常的に患者さんにおよびやすい長期療養病棟において、天井をやさしい色調の絵画や布で装飾することにより病室内の環境を改善し、その効果を検証してくださいました。患者の生理的指標や心理的指標の変化として、抑うつ度の指標（CES-D）などが測定された結果、「絵を装飾し病室を明るい雰囲気にし、鑑賞するだけでも抑うつ度が改善することがわかった」という結果が得られました。（「 」内は学会発表論文から引用）



堀江病院

(3) 東京・国立病院機構・東京病院

ここでは、約4カ月間、病院のエントランス・受付ホール全体、検査待合室、ターミナルケア病棟の食堂などで、1.3×1.0mの大型の絵画約

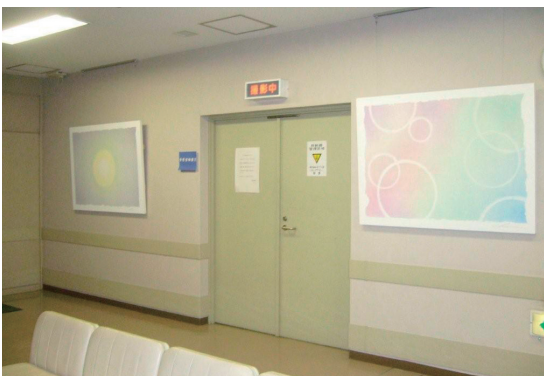
30点、長さ4mの羽衣（タペストリー）5枚などが飾られました。数値的指標は測定されませんでしたが、アンケート結果では、回答者のうち約70%の方から「治療前の不安が消えた」「気持ちが落ち着いた」などの評価をいただきました。



東京病院

(4) 宮城・国立病院機構・仙台医療センター

ここでは、外来ホール、ストレスのかかりやすい放射線治療室の前に絵画やタペストリーなどが置かれました。患者さんからは「治療の気持ちが落ち着く」などの評価をいただくとともに、地元の新聞でも取り上げていただきました。



仙台医療センター

(5) 長崎・三島眼科医院など

これまでの取り組みの多くは一定期間の実験的な取り組みでしたが、いくつかの病院で、建築家（㈱GEN設計）の方の協力を得て、患者さんの「心のケア」のために、病院建設の設計段階から待合室などに積極的に絵画を取り入れて

くださるところもでてきています。長崎県の三島眼科医院では、子供向けの待合室の天井と壁一面が私の絵で飾られています。



三島眼科医院

5. 医療とのコラボレーションの今後

これまでの取り組みで、一定の効果があることが認められてきました。しかし、科学的な客観性をもった検証という意味では実績が足りない状況です。医師の方によっては、否定的な見解をお持ちになる方もいらっしゃると思います。

ただ、繰り返しになりますが、私は、絵画で患部そのものを治せるなどと主張しているのではありません。補完・代替医療の一部として使われ、患者の悩み苦しみの緩和など心の癒やしに貢献でき、それが人によっては「病は気から」の部分に作用して治療効果を高めることにつながればと思っています。絵画は、感性に働きかけるものですから、私の絵に強烈に反応する方、何となく心地よく感じる方、無反応な方とさまざまな反応がありますが、少なくとも、私の絵には反発という副作用がないのが大きな特徴です。ある精神科医の先生は、「Chieさんの絵は、自己主張の強い、画家の自我が出ている絵ではありません…それを見る人を明るい気持ちにさせ、心を温かく包み込む…こうした心地よいメッセージが、患者さんを自然と落ち着かせて、その心理状態によい影響を与えようと考えられる」と評価してくださっています。

私の小さな試みがきっかけとなって、医療に携わる方々が、絵画を用いた心の治療に関心を持ち、現場で実践し、科学的な検証などを通

じて効果が立証され、より多くの方々がホスピタルアートを実践する、ことにつながることを願っています。



「絆」

6. もう一つの展開…海辺のアートセラピーの開催

一般には、絵画は、「芸術作品」として扱われる場合と、「装飾品」として扱われる場合に大別できると思います。前者の代表は、美術館という特別の空間で「鑑賞」するもの、また日常生活の中で「美術品」として大事に展示されるもの、後者の代表は、壁の「装飾」でしょう。私は、人の感性に働きかけて、その人の心の持ち方を変える「道具」として使うという絵画の新しい可能性を試してきました。

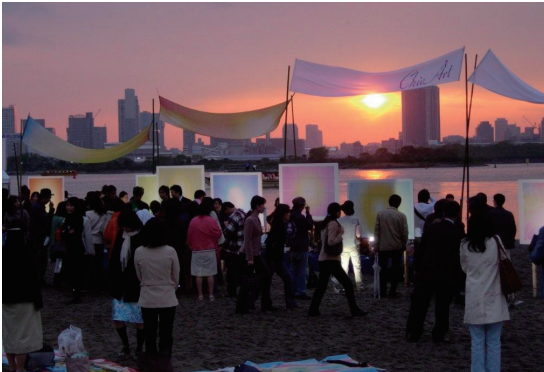
その一つが、前述のような、病院で患者さんや病院のスタッフに癒やしや希望を与える道具として使える可能性ですが、もう一つは、今度は絵を戸外に出し、雄大な自然や美しい景観の中で、絵画をみることで、自然や美に対して心を開く道具、感性を刺激する道具として使えな

いかと考えました。

私は、海・海辺が大好きです。海・海辺は、人々の心に癒やしや安らぎ、感動や希望を与える力を秘めています。しかし、刺激に満ちた大都会に住んでいると、人々の自然を感じる力が弱くなっているため、身近な自然の美しさに感動しにくくなっているものと考えられます。私の絵を通じて、自然や日常生活の中にある美しさに対する感性が刺激され、海・海辺を大事にしていこうとする人が増えればと、思っていました。幸い、海・海辺の文化について活動している団体が、声をかけてくださいました。

写真は、(財)港湾空間高度化・環境研究センター(略称「WAVE」)の主催、私はプロデューサーという形で東京・お台場で開催された野外イベント「海辺のアートセラピー」(2006年4月)の模様です。夕方から薄暮に、お台場海浜公園

の人工ビーチに「絵画」を展示し、雄大な自然と美しい夜景、静かな海を背景とし、絵画に囲まれた砂浜で、音楽や朗読を聴いていただきました。



下の写真は2008年6月に横浜・みなとみらいで開催した海辺のアートセラピーの様態です。横浜港の海上に浮かぶ国土交通省所有の浮体式海上防災基地を使用させていただき、ChieArt10周年記念として、私自身が主催し、NPO法人キャスネット、㈱サワヤ、日本郵船㈱、国土交通省、横浜市など多くの方が協力・後援してくださいました。浮体式防災基地を海上シアターに見立て、自然（海、空、夕日、風、潮のかおり）



と美しい夜景を背景とした開放的・幻想的な空間の中で絵を鑑賞するとともに、詩の朗読を聴いたり、手を使った絵画技法のひとつ、サンドアート制作体験、歌の合唱を行いました。

イベントの際のアンケートやいただいたお手紙・メールを見ると、これらのイベントにより、何かを感じ取っていただく道具として私の絵がお役に立てたかなと思っています。

7. おわりに

日常生活の中で、人々の心に働きかけ、癒やしや希望を与える道具として、また美や自然に対して心を開かせる道具として、絵画が使えないかと思い、さまざまな活動をしています。共通しているのは、人の行動や病気の治癒のためには、科学・技術的な働きかけ（外的変革）とともに心の変革（内的変革）のコラボレーションが有効ではないかという思いです。

まだまだ小さな取り組みですが、このような活動に対する共鳴・共感により、一つ一つの活動の輪が広がり深くなり、また多くの輪が生まれ広がり、全体として大きな活動の輪となり、新しい治療法としてあるいは文化として根づくことを願っています。

そのためにも、医療に携わる方々に共鳴・共感をいただき、活動の場が広がればと思っています。